

1000人Webアンケートによるドライアイ症状とVisual Display Terminal時間との関連

有田 玲子^{1,2}, 福岡 詩麻^{1,3}

1) LIME研究会, 2) 伊藤医院, 3) 大宮はまだ眼科西口分院

【目的】 コロナ禍以降、大人はリモートワークが増加し、子どもはタブレットやパソコンによる学内外での授業が増加している。今回、ドライアイ症状とVisual Display Terminal (VDT)時間に関するWebアンケートを行った。

【対象と方法】 小学校5・6年生の子をもつ30～50代の親500人（父親・母親各250人）に対し、親自身と子500人（男児281人、女児219人）のドライアイ症状の有無と平日のVDT使用状況に関して、眼科医監修のもと現代人の角間ケア研究室がWebアンケート調査を行った。

【結果】 平均VDT時間は、親は 4.8 ± 3.8 時間、子は 2.5 ± 2.3 時間であった。37%の親がリモートワークを行っていた。子の学内外の学習におけるパソコン、タブレット使用率は82%だった。眼精疲労を親の74%、子の36%、眼乾燥感を親の47%、子の20%に認めた。親も子も眼精疲労・眼乾燥感あり群は、なし群に比べ、VDT時間が有意に長かった（親： $P=0.002$ 、 <0.001 、子：共に $P<0.001$ ）。リモートワークあり群の親、VDTによる学内外学習あり群の子の方が、なし群に比べ有意に眼精疲労や眼乾燥感が多かった（親： $P=0.003$ 、 <0.001 、子：共に $P<0.001$ ）。子では眼精疲労や眼乾燥感あり群の方が学内外のVDT学習時間が有意に長かった（共に $P<0.001$ ）。

【結論】 親も子も眼精疲労あり群、眼乾燥感あり群のほうがVDT時間が長かった。大人のリモートワークや子どものVDTを利用した学習に伴うドライアイ症状増加に注意を要する。

【利益相反公表基準：該当】 無

【IC：取得】 有

【倫理審査：承認】 有